祖国へ帰ってきたのだとの実感がほのぼのと胸にしみ、熱い涙がほおをぬらした。

厳冬のシベリア、二度と行くことのできぬ、二年有余を過ごしたあの炭鉱街。子供に伝えるべく、今、温かく思い出として残る黒ダイヤよ。

歯をかんで、母国の土を踏むまでは

千葉県　村上武士

光陰は矢のごとしとか申します。当時、中国に、夜明けのガス灯という言葉がありましたが、道路の両側に立ち並ぶガス灯が、朝霧に包まれて、ぼーっとしていることを言います。戦後五十年近くも過ぎ去ろうとしている今日このごろ、昔のことを振り返っても、このガス灯のようにぼんやりとしていて、定かではないが、脳裏にこびりついていることのみを、かいつまんで書いてみました。

戦雲ますます暗く立ちこめる昭和二十年七月、我が部隊は、第一一七師団第八七旅団独立歩兵二〇三大隊弘一四六七部隊は、満州警備の転属命令により、部隊移動。河南省開封より、八月十日過ぎと思うが、新京に到着したのであります。途中何ごともなく、ましてや、ソ連軍の満州突入ということも寝耳に水の状態で、下車したのであります。

さしあたり、南新京に通ずる主要道路のソ連軍侵入を阻止妨害するための指令が下った。道路の側面数メートルおきに、タコつぼ穴を掘ることであった。任務は、数時間後、新京に突入するソ連軍をフトン爆雷を抱え、各自がこのタコつぼ穴に待ち伏せして、敵の戦車を破壊するという任務のものである。トウモロコシとコウリャンの生い茂る畑の中をガの大群と戦い、悩まされ、ようやく掘り終え、十六日の午前と思うが、中隊長が乗馬姿であらわれ、作業を中止し兵舎に引きあげよとのことでした。隊長の報告によれば、まことに残念だが、この大戦は終結したとのこと。連絡あるまで、次の指示を待てとのことであった。

武装解除

敗戦の涙雨でもあろうか、無情の雨が毎日続いた。そして、数日後、我が軍は南下して、公主領で武装解除とのことで、雨の行軍が始まったのである。砂利一つ敷いていない雨道を、後から後から、武装解除のための我が軍の戦車が容赦なく道路を刻んでいく。いっそう泥道となり、常に足首まで泥に浸る始末となった。途中、満軍の反乱等に出遭い、全く生地獄そのものであった。

そして四日後、数百キロを雨に打たれ、泥にまみれて、ようやく目的の公主領に到着したときには、魂の抜けた人間そのものであった。人の命より大切とされていた銃も剣も、真っ赤に錆びつき、見る影もなかった。そして、長い月日、行動をともにしてきた兵器と最後の別れをしたのである。武器を捨て、本当に体一つ、軽い身となったのであります。

北国行に乗せられて

そして一か月後の十月と思うが、部隊長の挨拶の中で、「君たちは、これよりもっとよい環境のところへ行く」とのだましの言葉に乗せられて、黒い貨車に牛馬同様に積み込まれ、北へ北へと北上するのであった。途中、ハルピン駅と思うが、私どもを乗せた貨車が一時停車したが、ふと破れた扉より外を望むと、南下するホームに三十歳くらいの婦人が背中に、左右の手に、幼い子供の手を引き、しかも、はだしで、少量の荷物をそばに置き、コンクリートのホームで列車待ちをしているのが、いかにも痛ましかった。

そして遠くに目をやれば、ソ連軍の戦車が我が物顔で街中を行進しているのが見えた。さらに貨車が北上して孫呉まで来て、またびっくり。ソ連軍の爆撃であろうか、あの重い機関車が重なり合っているのを見て、戦争の恐ろしさをまざまざと見せつけられる一面もあった。ようやく貨車は黒河に到着。小雨降る中を、砂糖運搬などの使役などさせられながら、渡河の順を待った。何しろ大勢の人たちが、いかだにも似たお粗末な舟で渡るわけで、大変なものである。ようやく白い屋根の立ち並ぶブラゴエシチエンスクに渡り、今度は、おんぼろ貨車の真ん中にストーブ、そして横の窓際に

二十センチくらいの便所用の穴のあいたものに乗り移され、一路北へ、北へ。行けども行けども、カラ松林の中を、刑務所で有名なチタ、そして、水のきれいなバイカル湖のほとりを右に、クラスナヤアルスクに到着し、支線で数百キロのところにあるアバカンという炭鉱の町に着いた。小雪が舞い、有刺鉄線を張りめぐらされ、しかも四方には監視台のついた、古い囚人宿舎跡のような場所に収容され、いよいよ寒地での作業が始まるのである。

衣食住について、衣より

衣といえば、満州より各自持参した衣類では、零下四十度、五十度の寒さにはとても耐えられるものではなかった。肌着から上着まですべて予備はなく、着たきりスズメで、洗濯さえもできなかったのが現実である。一年八か月、ずっと着どおしなので、雨がっぱを着ているようである。シラミがわくたび滅菌の繰り返しであった。強いて言えば、私は、靴だけはソ連製のカートンキという動物の毛で圧搾したものと交換してもらったことがラッキーというか、しかし、それがまた大変で、乾燥していればよいのだが、一たん水が付着すると、中まで浸透してきて、足の指ともども凍りつき、脱げなくなる心配が多分にあった。手袋といえば、綿でできた親指とほか四本が分かれていて、一つの袋になっている大きなものであったが、一日中寒さのために、指先がしびれてきて、感覚がなかった。

食について

食といえば、一年八か月いるうちに、米の飯が二回ほど出されたが、その中にもみが半分混入しており、とても飯といえるほどの代物ではなかった。いちいちもみを吹き出せば、半分は捨てることになるので、よくかんでのどに送り込んで食べたもので、これも私の抑留中、たったの二回きり。あとはソ連特有の酸化した黒パン三センチほどを一切れと、動物の骨を煮だした出汁で、大豆または小豆、または燕麦を入れ、雑炊風に炊き上げたものを、小さめのそばどんぶりに一杯ほどが毎日の定食であった。馬鈴薯といえば、ソ連では主食なので、とても抑留者の口にはほど遠かったのが現実である。以上のようなわけで、日常、胃の弱い

人は寒さと食糧粗悪で栄養失調となり、数多くの人々が他界されてしまったのである。

現在は、健康を保つには腹八分とされているが、腹五分ぐらいしかなく、話題は食べることばかりであった。作業の帰り、野原よりアカザという野草を摘み、持ち帰り、室内の電灯よりニクロム線を使ってゆでるのであるが、なかなか上手にできない。そのうち、ソ連の監視兵が回ってきて、「電力を消費するので」とどなられた。ソ連の畑には、銃を持った監視兵が常に見張っていて、私たちの友達も馬鈴薯を盗みに入って見つかり、射殺された人もおり、まことに痛ましい事件であった。

住について

住といえば、寒さを防ぐために、地下を掘り下げて屋根のみ露出している建物で、入り口が二重になっており、外の扉はいつも凍りついて、一面氷の花のようにつららが下がっていたものだ。布団といえば、綿は全く入っておらず、布団の形の布におが屑を入れ、布団がわりにしていた。よく乾燥した屑ならよいが、乾燥していないので、いつもじめじめしていて気持ちが悪いが、文句も言えなかった。

入浴については、何百人という人が順番に入っていくので、夕方適当な時間ならよいが、時には、夜中の十二時、夜明けの二時、三時となることもしばしばであった。風呂といえども、湯船など全くなく、少量の湯で体をぬらす程度しかなく、とても洗うことなどできない。凍りついた夜道をとぼとぼと、二十分も歩いて帰ると、すっかり体も冷えきってしまう。楽しいはずの入浴が害となり、帰ってくる。月一度の入浴が、楽しみとかでなく、またかという気になってきた。

便所といえば、深い穴を掘り、その上に丸太を置き、板を張り、十人くらいが一度に使用できるようになっていて、塀も区切りも、恥も外聞も全くない。皆同じ穴にするので、だんだんと便が凍りつき、とんがり帽子のように積み上がり、凍りついた便が尻につくようになる。仕方なく、鉄棒で凍りついた便を砕き落とす。また積もるので、砕き落とすの連続で、ほかでは見られぬシベリアならではの光景である。

当時私は二十歳の青年であったが、やはり栄養失調で二十日ほど病んでいたが、あるとき作業の帰り、道なき草原を歩いていると、一個の小さい玉ネギが落ちていて、それを拾い、宿舎に持ち帰り、水洗いして、薬のごとく少しずつそのまま生でかじった結果がよかったのか、下痢もたちまちとまり、一命を救われたこともありました。

作業について―水道作業

どこを向いても山らしきものは見えない。見渡す限りの大草原。小高い丘の向こうから、ちょうどアリの行列のごとく進められている水道管敷設工事。延々と何キロ続いているものやら、皆目見当もつかない。四人一組となり、幅一メートル、深さが二・五メートルくらいと責任が分担されている。幸いなことに、夏期なので凍ってはいないが、まともな道具一つなく、ただ作業能率、ノルマだけを計算されるのだから、無責任きわまりないが、これが抑留者の宿命であろうか。

貨車の荷おろしについて

水道作業から貨車の荷おろしと作業が変わった。作業場が遠いのでトラック通勤である。朝七時、薄暗かった。ごく冷えた朝など、あたりがぼーっとしていて、夜明けの星がそちらこちらに見える。時には北斗七星を見つけて、あの星の下に私の母がいる、家族の待つ故郷だなあーなどと一人考えている。

だれ一人としてむだ口をきく者もいない。ただ、足踏みの音だけが切なく聞こえる。じっとしていれば、足がしびれて凍ってしまうからだ。時折、無情の風がほおをたたく。ようやく迎えのトラックが来た。荷おろしの作業内容といえば、東ドイツから運ばれてくる石灰液化の部品が、一日貨車で四十～五十台運ばれてくる。荷おろしといえども、機械も何もなく、ただあるのは、古いブルトーザ一台にロープをかけて引きずり落とす、これが唯一の方法であった。従って、精密な部品も相当に破損したとか。某曹長は、その責任を取らされ、私どもの帰国の日、ソ連裁判にかけられ、九年の刑が確定したとか、まことに気の毒な一面もあった。

夕方、収容所の門を入って、またまたびっくり。製

材所の板の屑でつくられた棺桶に入れられた七、八人の遺体が路上に無造作に放置されているのが目にとまる。次はおれの番かなと思う恐怖におののいたこともしばしばであった。

友の墓掘りについて

シベリアは冬ともなると、殺人的寒波が襲来する。アバカン地方でも、夏ともなると一通り暑くなり、休憩時間などよく日陰回りをしたこともあった。たしか昭和二十一年の十二月三十一日と記憶しているが、この日がまたとてつもなく寒い日であった。作業も待機になり、室内にいると、通路の方でどなっている声がする。ふとそちらの方へ耳を向けると、だれか使役に四人ほど欲しいとのこと。順を数えると、ちょうど自分も番に当たっている。寒波で作業待機になっているものを、何とまあと思いつつも身支度をして、ちぎれるような吐く息をも凍る屋外に出た。用件は友の墓掘りだという。

ソ連の監視兵を先頭に四人一組となり、一面雪におおわれた小高い丘の上にとぼとぼたどり着いた。そこはソ連住民の墓らしく、また雪の中から十字架か卒塔婆らしきものが突き出していた。その隣に、夕方までかかって凍りついた丘に一メートルくらいの穴を掘ったことを、今でも鮮明に覚えている。数十年過ぎた今日でも、その日が来ると、あの穴に埋められたお人は、果たしてだれだったろうかと、今でも、私の脳裏をかきたてる。

ようやく帰国の日が

私どもの宿舎の向こうの支線に数日前から数十両の黒い貨車が入っているのを、不審な思いでながめていたが、これが私たちのダモイ列車とは夢にも思わなかった。そして、その待ちに待った日がようやく来た。死去された人たちを残し、数々の思いを胸に、分厚い氷の解け始める四月、来たときと同じ貨車に積み込まれ、恨みと恐怖を残し、貨車は一路アバカンの町をすべり出したのであります。そして、バイカル湖を見、明けても暮れてもシラカバとカラ松の立ち並ぶ雪の大草原を数千キロ、十四日昼夜走り続け、海の見えるナホトカに下車したのが四月二十日。当時の朝は、まだ

薄氷が張り、指先を刺激した。ここで、しばらく思想教育が始まった。調子を合わせ、聞いているふりはしているが、だれも本当には聞いてはいない。

ようやく乗船の番が来た。まるで汚れたシベリアのあかを洗い落としてくれるかのような小雨降るタラップを登りつめると、船長さんが「ご苦労さまでした。この船は明朝舞鶴の港に」の声とともに、疲労と安心感が交差して、一筋の熱いものが甲板をぬらした。四十数年過ぎた今でも脳裏から離れない。船名は恵山丸。こんこんと照りつける五月の太陽。傷ついた私どもをいたわってくれるかのような菜の花も、ほほ笑んでいるかのように見えた。そして、五月二十日過ぎ、赤い夕日の沈む夕刻、故郷鹿野山の北のふもと、家族の待つ我が家に、疲れた体にむち打って、足取りも軽くたどり着いたのであります。

れんが工場

岩手県　小岩敏夫

昭和二十一年五月三十日朝、百人くらいチヤマ療養所をトラックに乗せられて出発した。

途中、れんがの建物、一般住民の土れんがの家、ポプラの並木が広い平野に点在している。ウズベック人の姿もある。日は照りつけるが、トラックが土煙を上げて走っているので、風に当たって涼しい。監視兵は運転助手席に一人、荷台の前方アングルに一人、こちらは立っている。私たちは四列になり後方を向いて座る。

二、三時間ぐらいでれんが工場のあるれんが塀の小さい収容所に着いた。塀の高さは三メートルぐらいで、塀の上には有刺鉄線が内側に向けて斜めに張られていた。望楼が二つあり、監視兵が自動小銃を肩に掛けて立っている。門のところに収容所長以下将校三人、下